

## 牛たちと出会う

八月十七日 晴れ

今日、職場体験学習で、伊万里市内の牧場に行ってきた。今日一日のことを振り返ると、あまりに興奮して眠ることができない。

そもそも、どうして牧場を選んだかというところ、汗をいっぱい使って体を使う仕事をしたかったからだ。それに、自分たちがふだん食べている牛肉がどうやって育てられているのかも興味があったし、牛という生き物とふれ合いたかったからだ。

主な仕事としては、牛舎の掃除とえさやりだった。言葉で言えばたった一言ですむが、けっこうな重労働だった。牛舎には、牛が全部で九十頭あまりいた。山口さんのところはこれだけの牛の世話を夫婦お二人でなされていた。

牛舎の掃除というのは、簡単に言えば、ふんとおしっこにまみれたおがくずを、全部取り除いて、新しいおがくずにかえる作業だ。牛たちをすみの方へ寄せて、多くはブルドーザーのような機械で取るんだけど、端にたまったおがくずは僕たちでスコップを使って真ん中に集めた。この作業は腰が痛くなり、汗がびっしょりになった。この仕事をしていて気付いたことは、ふんやおしっこにまみれたはずのおがくずが、あまりくさくないということだった。その理由についてたずねると、「うちはおがくずがびちゃびちゃにならないうちに取り替ええるもんね。ここにいる牛たちは二年ちょっとするぎ、さばかれて食べられてしまうけん、ここにいる間だけでも、ここで生活できてよかったって牛たちに思ってもらいたかよ。」という答えが返ってきた。新しくなったおがくずの上はよほど気持ちいいのか、さつきまでは立っていた牛たちが、みんなすわりこんだにはおどろいた。

えさやりは一日二回やられていた。牛たちは大食いで、牧場全体の牛で、一日に五百キロものえさを食べていた(えさ代だけで一ヶ月に九十万円ぐらいかかるそうだ)。ということ、五百キロのえさを毎日運ばなければならないのである。えさは大きく分けると、ほし草と、麦やトウモロコシを混ぜたものに分けられる。ほし草はブロック状のかたまりを手でほぐしながら与えるのだけれど、意外とかたくて、何度か手にささって痛かった。麦やとうもろこしなどを混ぜたものは、米ぶくろのようなものに二十キロ弱入れて運ぶんだけど、僕は力がないもんだからこぼしそうになった。僕は、えさはどれも同じものと同じ量与えるもんだと思っていたら、違っていた。中には緑のあおあおした草を食べる牛もいた。「えさのやりかたで失敗することもあるよ。二年以上大事に育ててきて、出荷前に死なせたことも何度もあるよ。」と言われた。

また、こうした仕事を毎日なされているわけだけど、牛は生きていくわけだから、自分が病気でも牛には必ずえさをやらなければならないのだ。去年、雪がひどかった日は、一時間かけて牧場のある山まで登って行ったそうだった。

夜は山口さんの牧場で育てられた牛の肉をバーベキューで食べた。「同じ肉でも、味のあるとなかとのあるよ。」と言われた。今まで以上に味わって食べてみた。

牧場で牛の体をさわってみたら、温かく、やわらかかった。それは、真っ黒なつやのある毛の上からでもよく分かった。僕たちと同じ、温かい血の通った生き物だということを改めて知った瞬間だった。